

貞丈雜記

十三下

73

6592

26



門 3  
號 6592  
卷 26

馬具之部

一 古ハ束ぬきの鞆 又 鐙ツミの月馬くぬき等 業の志すべし

なごハ人のせぬき之旧記をこそ知べし 今ハ人心の中より

まもり又手綱ツルも古ハ布フハ物を添ふるを司ひし之を今ハ

業の志すべし 又 鞆ツミも古ハ故衣を衣ヒし之を今ハ

赤アカ之鞆ツミの鞆ツミと武ブ鞆ツミ記キハ何ハ其ミノ鞆ツミと云イハぬき先

る鞆ツミの志す又 鞆ツミ目を赤アカ之鞆ツミと云イハぬき先 此

雜記十三

世二

昭和十九年四月五日  
三上二市二口  
贈

洗ありは洗滌ありるの鞭をがらとて射とて書  
藤鞭 ぬちと云る何う其外古書に言のがらと云る  
 いづれも何うの鞭とて言ひの事あるに鞭と云る  
 物ある言とありていふれども本名の唐の鞭とて古  
 来より同ハシひき端をまゝ唐の鞭とて腰よりしてハ  
 鞭とて言ひとあり馬の鞭といふ物ある言と云  
 ぬちといふと云事ぬちと云をむちと云たるは  
 唐の鞭ハ唐を亦つ物と何れも唐の鞭といふは  
 何れ物とされバ唐の鞭と云るは本名  
 鞭ハたゞ馬の鞭を痛めて也一が細き言ひに

唐のむちハ先ハ  
 草緒を付るその  
 草を亦つ馬  
 の皮はのこめ  
 して骨をい  
 ぬ唐のむちハ此



肉斗をいふ骨をいふはあぢむちおぢハむちをいふ  
 て少持つやういふ虹形は亦つと古書にありは傳  
 へりよげたるいまおひをそのまゝふらへバあつらつ骨を  
 いづれおぢといふおひをぬきてあつらつをやとてあつら  
 たるの口傳へむちのつらとていふは力まのせり  
 といふハ手をいづれおぢといふむちといふ本意ハ馬を  
 おぢやのすまをのりて痛むといふは  
 つら切付といふ白き防已ツラ藤ノ皮ヲムキタルナリを組む作る切付  
 といふといふは紋をきくといふはあつら白きといふ  
 あつらといふといふは武雜記の記あるにたう

法より切符の可ハ引目皮の増子を由ゆつら切符引  
目皮の増子も晴あり付ハ必用ゆこの人の知るは

一武雜記よりつら切符の多晴の付用は後をいさしめを毎

る多ハ不及見は家この紋をきく時ててら身はたうむの

付ハ必くても身はきく三好亭伊成に記云つら切符は紋

三つ、黒漆幸阿弥繪にきく或人云つら切符ハ草よりハ

あふど首首を組たる物之草よりをる古き繪

ももんくうきくは流むより正流あり室町家の時代よりつら

切符といひ物は流らうと組又真衡流白き精好をも包む  
思く紋をきくと云へり白かめく

も白せいこうも首首を組たる切符の代りといふおもしろくも首首を組  
るハ悪くも首首ありゆへ後ハいそれよかえ用ひるるべし真丈云

舊より作りたるハ鞆のあぐみわりき白かめく草より包たるを  
代り用多り作りされども本の名を失せし草より作りたるをも  
つら切符と云ふらん 上堅記云 永正の以上系考あり 切符ハつ  
本ハ舊より作りし

ら我家の紋をつらと見たり付らん又ハうり見も書ん

又江小記云つら切符本かめくハ晴女之又高忠守書云

犬笠掛ける付ハむきもる切符不苦所を組又ハそれの犬

笠掛の付はつら切符あるべし想てつら切符事云

一ハハせんハ赤きもるせんのもく火繩と書く死火のきの

めく赤きぬありし武雜記よりハせんのもく火繩のきり

尋ハハも赤きもるせんのもく火繩のきの付更考院

月てい云く真衡より旧記よりせんともあるハ今のさうせん

事ありき羅紗の事也

一 赤き毛纏の鞆履の事又火纏の鞆履とも云ふ京師將軍の仕物ありけり時代禁制ありけり此外の事を撰み不用之は毛纏といはれ世のわうせんは阿比世羅紗と云ふは異國より渡る物也(平人の用も事をもつたれは此兒あれば用之といはれ内書引付云 試引付ハ伊勢也 貞忠洞進引付)

是ハ赤毛纏也  
内書云

就白傘袋赤毛纏鞆履歩兒之儀太刀一腰 貞守

家助 馬一疋 葦毛下 雀目結 青洞五疋疋別来目出也

八月十日 太永二年ナリ

三雲源内左衛門との

是ハ赤毛纏也

為白傘袋赤毛纏鞆履放免之禮太刀一腰 貞守

と云ふたのありせ  
んは兒の内書  
あり

馬一疋 河原毛下 赤目結 青眼五疋疋別来目出也

六月十三日

浦上掃部助との

一 松浦きはち先祖は義教より火纏の鞆履は免を今に緋羅紗と色たるうかひを在りて用ると云ふ五疋大双紙と云ふ赤きわうせんの鞆履は公方様仕物の外を大名陸分の流はう古かけられつる色の物りたるを誰もうもひげにやいさ

一 唐ひらの切付と云ふ毛纏の切付と云うせんのみあり

平家物語卷の五

忠清ハマケの馬

マゴ寄て々上

総ありがひかけ

てうひあ

上堅抄云鞞ハ中

ぬきありありうい

一名をハ袋あつら

いハ云坂系鞞

とも云貞丈云

鞞といひ袋と云

ハよりてんハハ

平抄の紐の袋

おとハおのめく

紐ハおあまし

平抄の紐の袋

おとハおのめく

紐ハおあまし

志多すごとくそのらゝ如の事

一 かつさありがひハ上総國より出る名物之彦洲往來上総

鞞とありハ外日記ハは名何り謙倉將軍宗尊親

王のハ可謙倉ハ内記兵庫元隆鞞の故実を注進

彼家代ハ上総國ハおめくハ事をまけと東濫ハ兄たり

おめ志重ハいハおんどう志うハいハおんハ供取実記ハ

兄えうハ坂系鞞ハ上総志うハいハありあべハ東ハハ鞞ハ

故あり志うハいハおん

一 せんぢやハ鞞と云ハ大がさハおんハ延喜式ハ曰

凡六位以下鞞鞞總不得連着但聽若鞞衢及後束

ハ心ハ延喜年中の法ハ六位以下ハ鞞の總を是ハはハ

たりハハ用ハ事ハゆるハされハ但鞞のハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

追考  
 世俗淺深秘抄ヲ  
 見ルニスハヘシリ  
 カイ亦ナシ草  
 ニテ縫タルニ相  
 違ナシ楚鞞ニ  
 香葉付テ唐  
 鞞ノ具ニ用ル  
 事見タリ

楚鞞ハヘシリカイといふ物の詳ありは銚抄に楚鞞の名をえて赤滑式  
 ハ朱漆廣サ一寸四分両方長サ四尺二寸ありてこれに草を縫ひ  
 作る鞞といふは木の皮を以て杖あり楚鞞草といふ  
 作りて總なき木の皮を以て杖ありたてたる物也  
 一 遠江志を以てて遠江より出づる苗株の志りといふは  
 志江ありて志りといふは旧記にありき江にありて志りといふ  
 名也

一 丸めん志りといふは木綿緒を以て鞞作りたるを云也  
 此は糸肉松永彈正より伊勢守貞孝へ尋りて糸肉の内  
 むんめん志りといふ志りの事と貞孝志りといふは本は

上古ハ緋、鞞  
 禁制也延喜  
 式ニ見タリ

一 丸めん志りといふは木綿緒を以て鞞作りたるを云也  
 此は糸肉松永彈正より伊勢守貞孝へ尋りて糸肉の内  
 むんめん志りといふ志りの事と貞孝志りといふは本は

一 田記に馬の志記とあり七寸とありは志記に志記といふ  
 也此志記の志記といふは志記の志記といふは志記の志記  
 といふは志記の志記といふは志記の志記といふは志記の志記  
 といふは志記の志記といふは志記の志記といふは志記の志記  
 といふは志記の志記といふは志記の志記といふは志記の志記  
 といふは志記の志記といふは志記の志記といふは志記の志記

七寸と書くは... 又三寸と書くは... 方を表す寸五寸ありあれども...  
 を捨て大方をあけて三寸と書くと云ふは...  
 寸のまゝ三寸と書ひ寸の字をまゝと書かず...  
 と云ふは... 持清入道... 元の出...  
 墨れ... 又馬故実の...  
 阿の... 同本... 元入道...  
 宝徳元年十二月十八日... 伊勢...  
 左馬... 天文永祿年中... 寶徳元年より永祿  
 元年まで百十年... 古にお...  
 ... 遠く...

... たるもの... 審... 元... 継...  
 ... 子... けみ... 残...  
 ... 合て水... 二字... 同...  
 ... 名目古... 義... 系...  
 ... 二行... 又...  
 ... 義... 元... 昔...  
 ... 内... 古...  
 ... 大... 後...  
 ... 道... 草...  
 ...



一 三がいと云々 祠古のあり 古書ふの鉄と云て 三がいの惣名と云  
たりも有り 又面掛胸掛尻掛と云 鉄抄 又掛ノ字かけも  
かきとも唱々云一ケ音相違ある 故おもひのむあがいのあり  
かとも云 故後代三といふと云智 たりと佐野といふ志不  
とれ三といふも云を世用之下野國佐野ノ庄より作り出せ  
又佐野の西の方 滋養 志不れ といふ所より出るを志不たれ云と  
いふ所のあり

一 五六掛鐙のり 光大 回付 雜記は書載墨れたるのいふ  
五六掛の正説を得られざりといふ所の推考の説あるが  
け交割りありぬ 貞丈翁後は五六掛鐙考といふ所

冊を著し 鐙の考の全文を記す

五六掛鐙考

- 五六掛ノ鐙ト云ハ鉄ニテ骨ヲシテ木ヲ入タル鐙也何  
故ニ五六ト称スルト云ニ諸説區々也其諸説尤ノ如シ
- 或云鐙ヲ釣リ置テ五六三十貫目ノ重リヲ掛テ試ニヤナイ  
葉伸ルヲナシ故ニ五六掛ト云ト也貞丈云故伊勢因幡  
貞域ミラカ弟子伊勢浄齋云鐙ヲ試ニハ三十二貫目ノ重  
リヲ掛ルトゴ右ノ説三十貫目ト云ハ二貫目不足也三十  
二貫目ナレバ四八也五六ニハ非ズ右ノ説用可ラス
- 或云鐙ヲ釣リ置テ五六三石ノ米ヲ重リニ掛ルニ柳葉

○伸ル<sub>一</sub>ナシ故ニ五六掛ト云ト也貞丈云此說前ノ說ヲ  
轉變シタル也用ベカラス

○或云鉄五分木六分合テ作ル故五六掛ト云ト也貞丈云五  
分六分ト云ハ何ヲ以テ其分量ヲ定テ云ヤ詳ナラス此  
說モ用可ラス

○或云昔甲州五六ト云里ニテ作り出シケル鐙ヲ五六掛ト  
云ト也貞丈云甲州支配ノ御代官ニ尋問シ五六ト云地  
名ナシ此說モ用可ラス

以上皆異說也

○貞丈先年元文ノ比伊勢因幡平貞域  
大坪直弟鞍  
鐙作之正統二

五六掛ノ名義ヲ問シニ貞域答云鐙ニ五六ノ矩ト云

コアリサレバ五六掛ト云由傳ヘ聞ケリト其時委クモ

尋問サリキ近頃貞域ガ弟子伊勢淨齋名曰二五  
全用

六ノ矩ノ事ヲ問シニ淨齋答云鐙ノ高頭或蛸頭ノ付  
トモ云

ギハヨリ舌先ノ外稜マテノ間五寸六分也鐙ヲ作ルニ

此五寸六分ヲ以テ定法トス是ヲ五六ノ矩ト云此五六ノ矩

ハ木ヲ入タル鐙ノミニ限ラス鉄鐙モ亦五六ノ矩也古キ

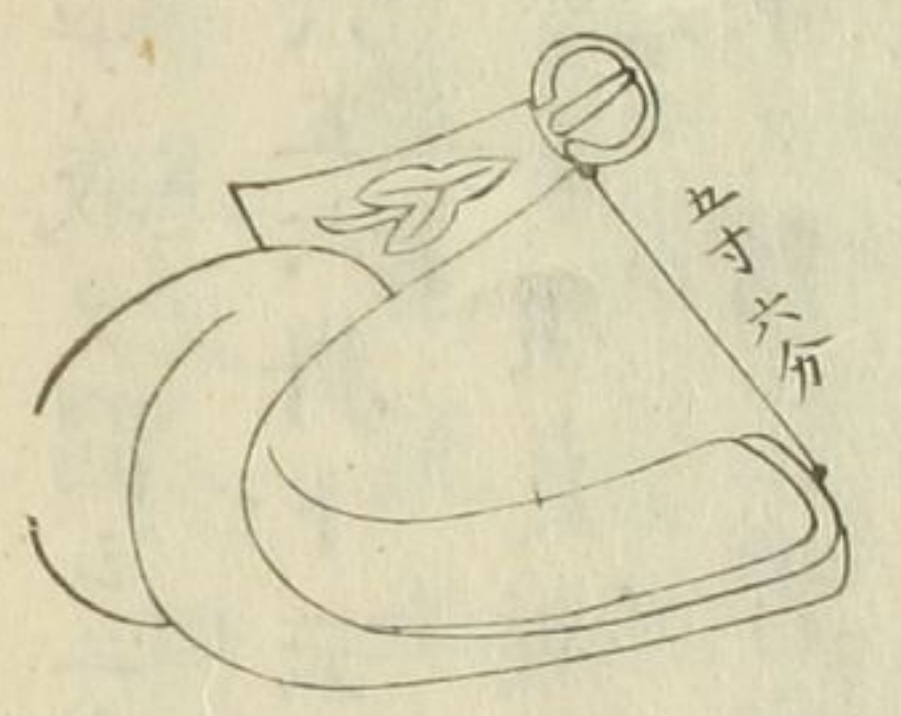
鐙ニハ五六ノ矩ヨリモ少延タルモ稀ニハ有リト貞丈右

ノ說ニ付テ木ヲ入タル鐙ト鉄鐙ト兩品共ニ高頭ノ付

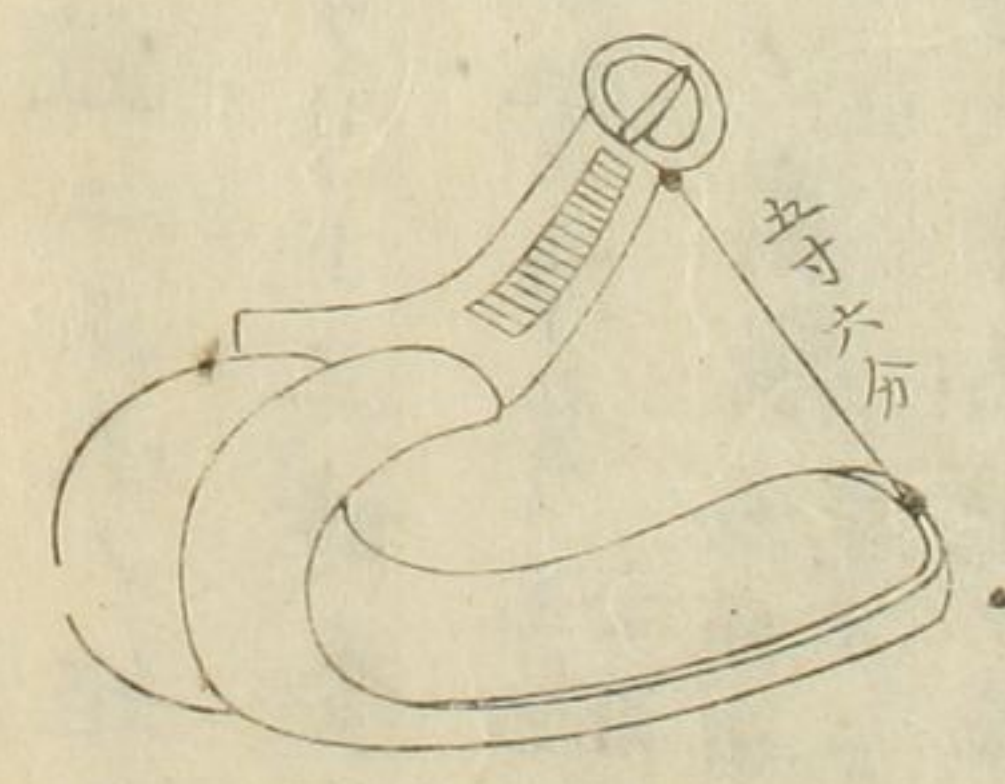
キハヨリ舌先ノ外稜マテノ間ニ曲尺ヲ當テ試ルニ五六ノ矩

合へり或ハ鐙ニ依テ一分又ハ五厘許ノ伸縮アルモ稀ニ  
 ハアレモ五六ノ矩ヲ定法トシタル上ノ過不及ノ誤ナルベシ鉄  
 鐙ハ鑢ノ磨過シ又塗鐙ハ漆地ノ厚薄ノ誤ナドモ有ベ  
 シ又ハ鐙主ノ好ニ依テ定法ニ少違フモ有ベシ是等ハ  
 通例ニ非ズ五六ノ矩ハ定法ニテ變動スルナシ五六ノ矩  
 ノ寸ノトリ様左ノ繪圖ノ如シ

木ヲ入タル  
 鐙五六ノ  
 矩ノ圖



鉄鐙五六  
 ノ矩ノ圖  
 真鍮鐙  
 モ亦同シ



右ノ圖ノ如ク木ヲ入タル鐙モ鉄鐙モ共ニ五六ノ矩ヲ用  
 ル也并レハ五六掛ト云ハ木ヲ入タルモ鉄鐙モ如此ナル形ノ  
 鐙ノ惣名也然レモ木ヲ入タル鐙ト鉄鐙トノ差別ヲ云  
 分ケンカ為ニ鉄ニテ作タルヲハ鉄鐙ト称ヒ習ハセシニ  
 依テ五六掛ト云名ハ唯木ヲ入タル鐙一品ノ名ノ如ク片  
 付キタル也

○上古ハ鐙ニ種々有シ也或ハ輪鐙アリ其形輪也南都春  
 日神殿ノ唐戸ニ画ケル餉馬ノ繪其外古画ニ見タリ  
 或ハ壺鐙アリ其形沓ニ似タリ南都東大寺法隆寺紀  
 州熊野新宮ノ寶物ニ在リ或古長鐙アリ其形輪鐙ニ



舌ヲ付シカ如シ銚抄ニ圖アリ又舌短鐙モアリ此名モ  
銚抄ニ出タリ皆形異也五六掛ノ鐙モ近世ノ物ニハ非ス  
奥州前九年後三年合戰繪保元平治合戰繪一谷合  
戰繪年中行事繪法然上人御傳記西行物語繪等其  
外古画ニ專多ク五六鐙ヲ画ケリ此五六ト云ハ木ヲ入タル  
鐙ト鉄鐙ト両品ヲ兼テ  
リ云ナ五六掛ト云フ名古書ニハ見サレ其鐙ノ形ハ古画ニ  
多ク見タリ右ニ云如シ五六掛ト云名ハ木ト五六ノ矩ヨリ出  
タルナレハ鐙作ル匠家ノ詞ナルベシサレバ古書ニハ其詞ヲ載サ  
ル欵木ヲ入タル鐙ヲ古ハ木鐙ト云鉄鐙ヲバカナ鐙ト云庭訓  
往來ニハ金地鐙トモ云

延喜式ノ左馬寮式ニ木鐙見タリ諸鞍日記前駢鞍篇  
ニ云前駢ノ鞍ノ事形ハ移ノ如シ鐙ハカナ鐙モアリ木鐙  
モアリ云々古画ノ前駢ノ躰ヲ見ルニ鐙ノ形今ノ鐙也  
然レバカナ鐙トアルハ今ノ鉄鐙ニテ木鐙トアルハ今ノ木  
ヲ入タル鐙ノ也也古ハ如此カナ鐙木鐙ト称シタルヲ兩品  
共ニ五六ノ矩ヲ以テ作ル故惣名ヲ五六掛鐙ヲ作ル也  
ヲ掛ト云佐々  
木掛日野掛  
ト云モ同例  
云ナル故五六掛ト云名ハ木ヲ入タル鐙ノ名ニ片付タル也

安永十年辛丑三月望 伊勢平藏貞丈書

右ニ五六掛鐙考の全文ありけ度補入之

光大吉キ煉鞍  
ヲ見タリ山形爪  
先ナトノ損シタ  
ル所ヨリ見ルニ  
中ニ厚サ五分程  
ノ木ヲ入テツノ  
裏表ヨリ牛ノ  
生皮四枚マハ枚  
重テ漆ニテ堅  
メタリ爪先ノ

方ハ六枚ニ見エタリ  
皮ヲ削リテ形チテ  
成シタル物ナルベシ  
扱其上ニ子リ物ニ  
地ヲミタル躰也草ニ  
テ包タル躰ニ六見エ  
サリキ  
光大曰和名抄ニ云  
鍔具楊氏漢語抄  
ニ云鍔具一音致鍔具  
此間ニ云實古今按ニ  
唐令所謂玉鍔是也  
腰帶及鞍具以銅  
屬草也  
文永四年歌合かこの  
川民部能為家  
オハ人の物うちや  
さうむき一兜ミ  
あそかろかこの川  
ミ

一 張鞍ハリクラといふもの一羊をとりて包たる鞍之鎌倉年中行  
事ニ張鞍ハ鞍覆かけて引事ありとあり羊をとり  
たる鞍あり故目ハ引ひてもひりれ換じり羊あり  
依ヨこコわワひヒかカらラ及及びビ於於東東鑑鑑卷卷十一十一ヨヨリ  
ウウハハ鞍鞍ととありありもも回回ととありあり

チリクラ  
煉鞍チリクラと云ハ下地を草にて包こす上は柄を付く  
地をこすぬきたる煉鞍と回こすことあり  
證チリクラのくくニあり煉の頭ハ細き柄を付く力草ハ一匹  
その細き柄を付くことあり柄を付くことあり又ひびきと  
力ハ一匹も又かくとこすかくのこすことあり

何の柄ハ煉の頭をかくことありと云々たうことありハ  
浦の煉のくびきをかくことありハあるものくびき  
あるかこの柄をひびきと柄をひびきと云々相うこ  
といふ字鍔具カクの二字を用ひし事あり此二字はまづて太刀  
遣カク以外の柄ありの事ハ延喜式ハ太刀の事記したる事  
鍔具とありハ太刀の柄ありの事ハ煉のくにも煉の柄あり  
ありハ鍔具の二字を用ひし事ありハこれト云々  
通じりハ柄ありと云々  
一 煉の柄を付くことありハ伊勢物語の事ハ「わさ  
し煉を付くことありハこれト云々」

うもやうとありびやう澄とて武苑西の澄古ハ名物とをいへ  
さすといふのやうにびやうカ草の穴へさすやうに

一 澄のちのうらやをびやうの物とびやうの草ともいふありやう  
之本名いふ川をうらやとてうらをその條をびやうとて  
ひび遠へをいふといふくは又ひび遠たうて或は澄はうらを  
といひ澄尾をみるの尾はひびうらみる尾といふを略し  
てうらをひびとてひび澄とて和名物とも近喜式あり  
トウタニ澄の二字を美豆乎とてひび澄とてひびのうらといふ  
但ふくいへむカ草の端のさきのみちき形のなれを近喜  
式もカ草毎に澄とてひび澄とてひび又保元物語の吳

義経記夜河合  
戦の条は太崎  
太郎の澄の草  
をうらといひ  
てひびのうら澄  
のうらをひび馬  
のうらやひび馬  
いふを切存が

半井本 月も環の力草をうらとて何りころころとて  
うらをひびとてひび上吉の澄と今澄の形の遠くをいふ  
と名はひびとてカ草もひびをひび上吉といひひびとて  
今月ひびのひびあり

二重腹帯の草 馭法秘傳集は云二重腹帯ハ布を二幅は  
して馬のせめへおきせしむるは鞆を腰後の下へ四上へ  
引あげ常のじとくくはを二重腹帯といふくは  
合戦ノ心也で修羅の耐高の馬よりとて又道照愚草は云腹帯  
を一帯より二帯の方共井をうらの上敷の上へ何とて  
もろびとて一帯の腹帯とて入るの下腹とて

ちびて服帯をききそ又ちびとをくへて能く志めて上表の  
 上をききのごとく一結志の結がて西の糸輪の手形よりつけてお  
 痛のあまむあびひまうけん志のゆく魚べり  
右取法秘傳集  
はのちのせきつ  
 へおきせをあり道思思あまの結の上表のよま  
又犬道相照鏡記云  
 鞆は二重服帯を思ふ事軍陣の扱よりせ余服帯を二  
 つして小服帯をくけて志むくはも結のよまうへて上表  
 の好ぬるこまは犬道相の  
二重服帯云 服帯を二つして六布のちびと  
くうちのこま  
 小まびびのこまを本又の又許すもくうへてはささ小まびびの  
 麻草より組たる服帯へあつ脱りぬはさるを上服帯下  
 服帯とも然とも上服帯下まひと云名目同記は也

只二重をくびと云へ  
表服帯小服帯  
は旧記あり

- 一 鞭長サ乃事糸の弓矢の筋矢つり長廿の筋より鞭の
- 一 一ひらひら紐の針糸具足杖修りあつて何うこまは略と
- 一 一かまへ繩ハ馬を引く手繩之武籠記より係申すは白
- 一 手繩を用ひかまへ繩と申し申すはこまは仕りたるこま
- 一 ひろかへりきばらう小仕りれ用害記よりかまへ繩と申す
- 一 一丈二尺より馬杖説は云はばらう繩をらもさう繩と申す但
- 一 他流にかまへ繩のさうやう言の者より左へかけこま
- 一 のどの下より結び短きすまを引志の長さ方をこまあま
- 一 痛の中へへりあ方へ引西へて響の十又本の環より

障泥と泥障  
ともまじ

より引通して又それをこの繩のそとへへりかたれを  
引て障泥を二重より引通してこれを二結び結て為へ  
泥障アフリと云ふ毛皮を以て作りしを云ふありし年見作りしをハ  
泥障アフリと云ふは事守宝弓兵監を見へたり 又其書記  
ももる泥障  
ハ中ハ雨天ハ衣服ハ何事つく泥を障り其の力あり  
後ハ晴天もこれをさして餅と云ふ武用ハいづぬ物  
有軍陣騎射に不用なるハあり又永正家中竹馬記に云  
ありきすり遠旅ありハいづぬ物ハ但し其も洛中か  
とよりやんありきして其ハ石の泥とあり

行膝ムカバキと云ふ可ハ泥障ハさすまじき泥障ハ不苦

宝弓兵監ハ見たうされバ大追物笠掛ハ泥障ハさすぬ障泥  
ハ中ハあるは衣服ハけ極あり泥を障り其の力あり  
ハ晴天も是をさして餅と云ふ武用ハいづぬ物有軍陣  
騎射に不用なるハあり 重出又永正家中竹馬記に云あり  
指り遠旅ありハ苦ハけす但し其も洛中かよりやん  
てありきして其ハ石の泥とあり

とつげ色の響と云ハ白くみづきたる響の上をうけ  
てんうすく塗たりし漆の色と漆の色とまじりてなり  
とつげといふ虫の色のごとくふるありし物ハ響ハ略儀あり  
とあがきの多犬追物以鏡記又犬追物方す書あり



風土記八日本国  
 中ノ所ノ山川ナ  
 トノ名ノ由来神社  
 佛寺田畠五穀  
 ノ負數名物亦  
 事ヲ書タル書ニ  
 上古ノ書ナルニハ  
 全部ハ傳ラスヤ  
 ヲ傳リタリ

一 手鑑（たてがみ）と云ハる者（たてがみ）也（たてがみ）其（たてがみ）の（たてがみ）記（たてがみ）ハ（たてがみ）武蔵（たてがみ）國（たてがみ）豐嶋（たてがみ）郡（たてがみ）貢（たてがみ）の（たてがみ）名（たてがみ）也（たてがみ）曰（たてがみ）奉（たてがみ）德（たてがみ）國（たてがみ）風（たてがみ）土（たてがみ）記（たてがみ）才（たてがみ）八（たてがみ）十（たてがみ）四（たてがみ）二（たてがみ）曰（たてがみ）武（たてがみ）藏（たてがみ）國（たてがみ）豐（たてがみ）嶋（たてがみ）郡（たてがみ）貢（たてがみ）

一 武（たてがみ）藏（たてがみ）國（たてがみ）豐（たてがみ）嶋（たてがみ）郡（たてがみ）貢（たてがみ）の（たてがみ）名（たてがみ）也（たてがみ）曰（たてがみ）奉（たてがみ）德（たてがみ）國（たてがみ）風（たてがみ）土（たてがみ）記（たてがみ）才（たてがみ）八（たてがみ）十（たてがみ）四（たてがみ）二（たてがみ）曰（たてがみ）武（たてがみ）藏（たてがみ）國（たてがみ）豐（たてがみ）嶋（たてがみ）郡（たてがみ）貢（たてがみ）

一 武藏國（たてがみ）豐嶋郡（たてがみ）貢（たてがみ）の（たてがみ）名（たてがみ）也（たてがみ）曰（たてがみ）奉（たてがみ）德（たてがみ）國（たてがみ）風（たてがみ）土（たてがみ）記（たてがみ）才（たてがみ）八（たてがみ）十（たてがみ）四（たてがみ）二（たてがみ）曰（たてがみ）武（たてがみ）藏（たてがみ）國（たてがみ）豐（たてがみ）嶋（たてがみ）郡（たてがみ）貢（たてがみ）

一 馬糸袴と云物古家き物古ハ言れる所ハ袴の袴のとはを  
取り着てはよおしをきとて 袴ありし是をふりきちとて  
日記にもんてり

一 志のけくると云ハ切符を志つけたるを云

一 鏡鞆とい鞆の惣柄を根又共瑜あどのうすり鞆を包ま  
たるを云惣廻りの履鞆をとりて

一 鏡鞆子と云小き丸鏡のめくうすを志て衣の方又袴の鞆子  
のめく結を志て装のめくありあり

一 馬糸の鞆と云ハ馬糸は馬糸と云物ありし馬を志する風呂

記と云

神馬はシテ  
舟ルト有来

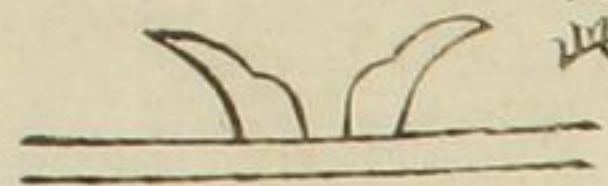
馬糸の鞆のり太竹の根を三六寸可切

節を志あふ一結をバあまはせ入て鞆びまびきとて  
とんぼうおいろへせびと一寸半まで切鞆とんぼうをバ  
入入鞆のかけ糸あいの板のむす子の根よりけきと鞆を  
見て自ら馬の志がも鞆と云

一 志りぬき又八木のり風呂記云馬糸の服うけ持の本は  
鞆形の形よりありは本ハ服うけを押へせんといへ  
たれども名あるべし八木と云人稀く又某貫とも  
云と云

一 ひんどうびりと云ハ力草の先のぬきと所とびとて  
まじりぬき 昂ぶがかうものなり びとて力草といハ力草とい  
本名と云わらぬと云

八木此



一 鞭は作。木熊柳一名磯柳とも云紀伊國又土佐國  
 などに有り浦々きのかろく此れはあく外の木はからく  
 つくおえあるひて折る事なきおむちふまると土佐ふ  
 てハ一名の浦々とも云之又かろくはとも云勝葛とも云  
 南園抄は見たりかろくは名小笠原の書ふ勝つる  
 と云おむちの用はとも云此れは木あるゆへ  
 折るかろくはとも云

一 上方極も鞭をさうはるは風呂記に云鞭をバ上方極  
 もさ指は近代は法住院殿極高館は成又鞭は  
 法成の可肩衣は袴を見さ指は又惠林院殿極高館は

雪の鈴の法成とも指は云々

一 鏡鑿と云はらるるの十文字の形を十文字は有りはるは  
 うものにてはるるあく鏡の如くは作りたるを云古き鏡  
 の書る騎馬武者の繪は有りはるは鏡鑿鏡鑿は鏡鑿  
 鏡鑿の名中院通方その傍抄は見たり

一 鏡鏡と云は鏡のともいふもの形を銀のうすくはるはつみ  
 たるを云之酒井雅樂頭忠恭の汗は寛治年中の鏡  
 のうすく物を見せしはるは物鏡鏡ありきは鏡ハ半  
 舌の鏡と云舌先者の鏡の半分はるはかこり志らをか  
 せりあてかこも上より下へをれり是

鏡鏡ハ半舌の  
 とも限るはるは

スイセウ  
一 水晶靴と云ハ靴の紋ハ水晶を入たる酒井雅樂治忠

恭乃許日て寛治年中の水晶靴の伊勢岡幡ウツスうろ物を見せ

色ハ其靴の形山形の袴腰基の二箇のゆく上の方之角

見え手形もあつたときこの場かそをこころに袴相事地

とて紋あつたときして紋のあハ水晶を少く穿て入り

水晶の下ハ朱緑青あつたときたが上ハ朱緑青あつて七

宝のゆく紋の形ハ穢より少くいさき圓形をあらしたる

を忠恭の好まると牡丹の花形ハ改らぬゆへ又其靴の

垢子ハ穢垢子付りう響も穢響深ハいり

一 尻シツナ總シツナと云ハ馬を引りし時ハ繩を少くして其の先ハ

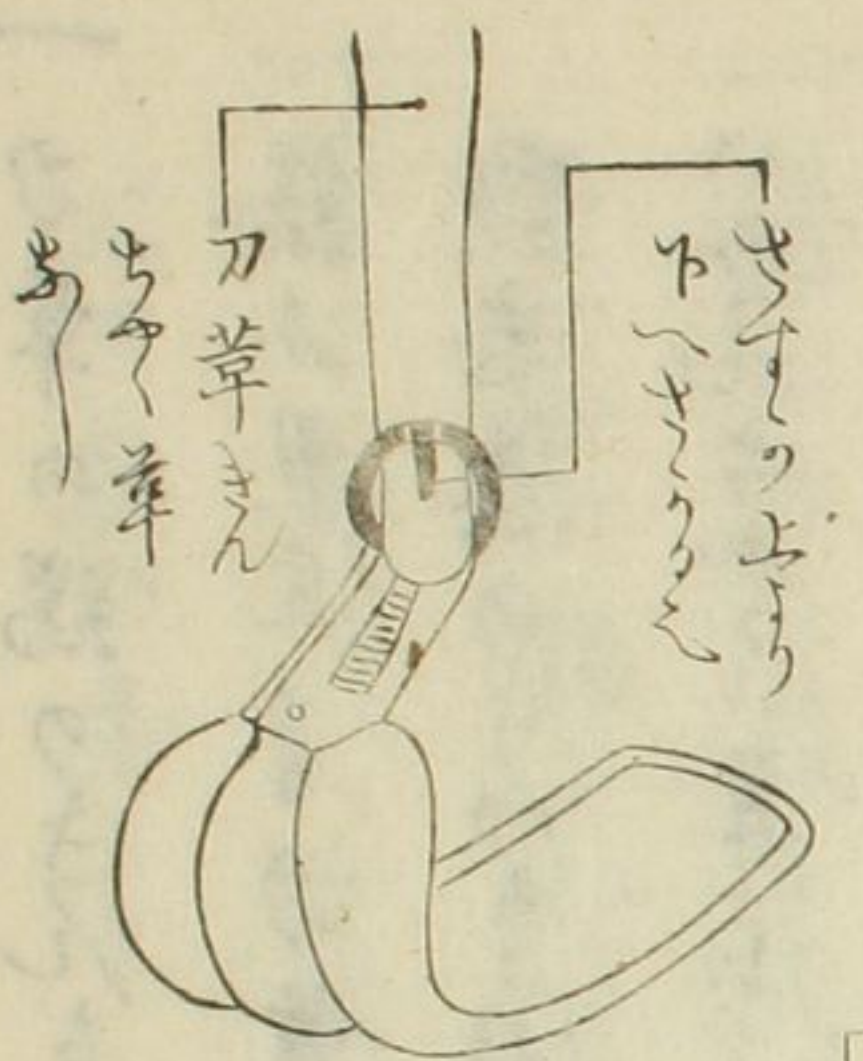
馬を引りし時

常用抄ハ馬の  
あつたとき  
と云ハ馬を引りし  
とハ馬を引りし  
とハ馬を引りし  
とハ馬を引りし  
とハ馬を引りし

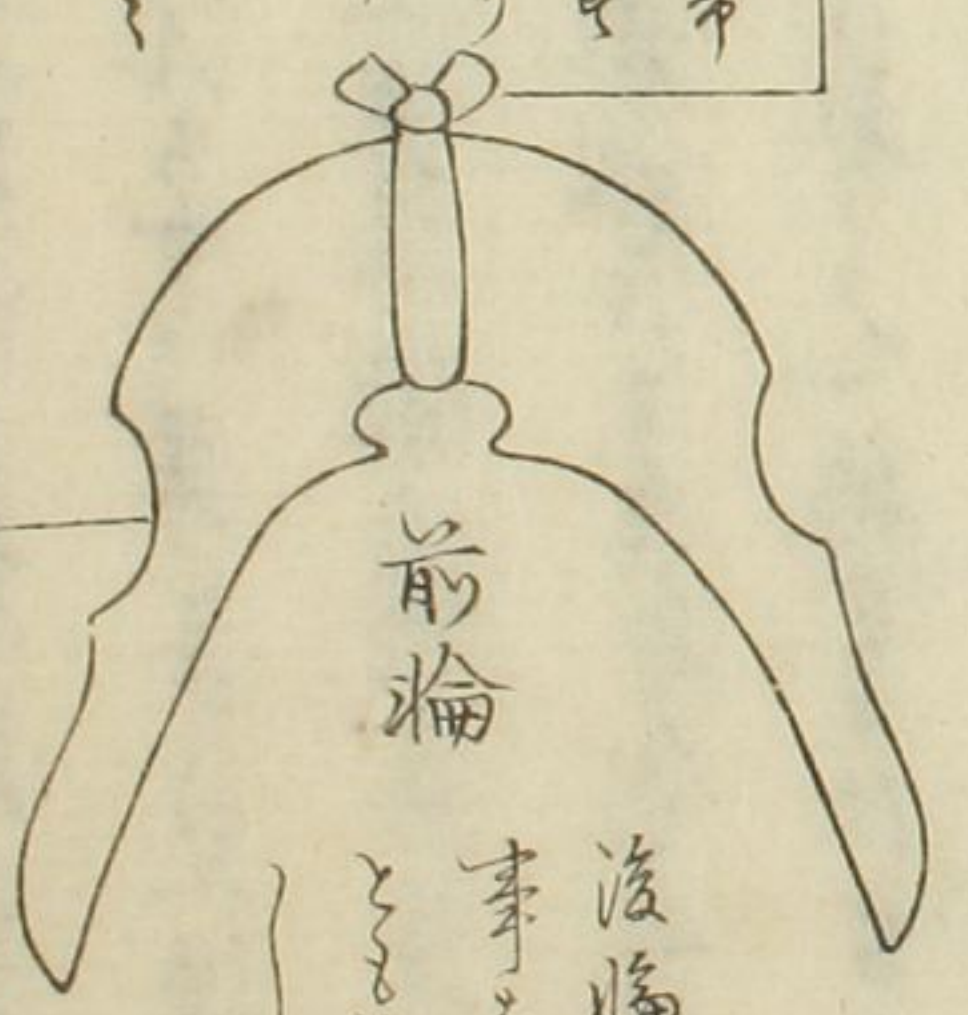
と進み走り出んとするを先ハ馬を引りしときあつたとき  
あつたときハ馬を引りしとき  
あつたときハ馬を引りしとき  
あつたときハ馬を引りしとき  
あつたときハ馬を引りしとき  
あつたときハ馬を引りしとき

一 後三年の孫孫兜兜物物見見ええるる靴靴力力草草

の袴袴丸丸ののめめ



は袴ハ二寸版帯  
を以てしむま  
びるる馬あつ  
とるびのま  
あり  
袴根ハ女  
黒ハアリ



後幅ハ二寸  
事ハ前後  
と云ハ山形  
子形ハ月形

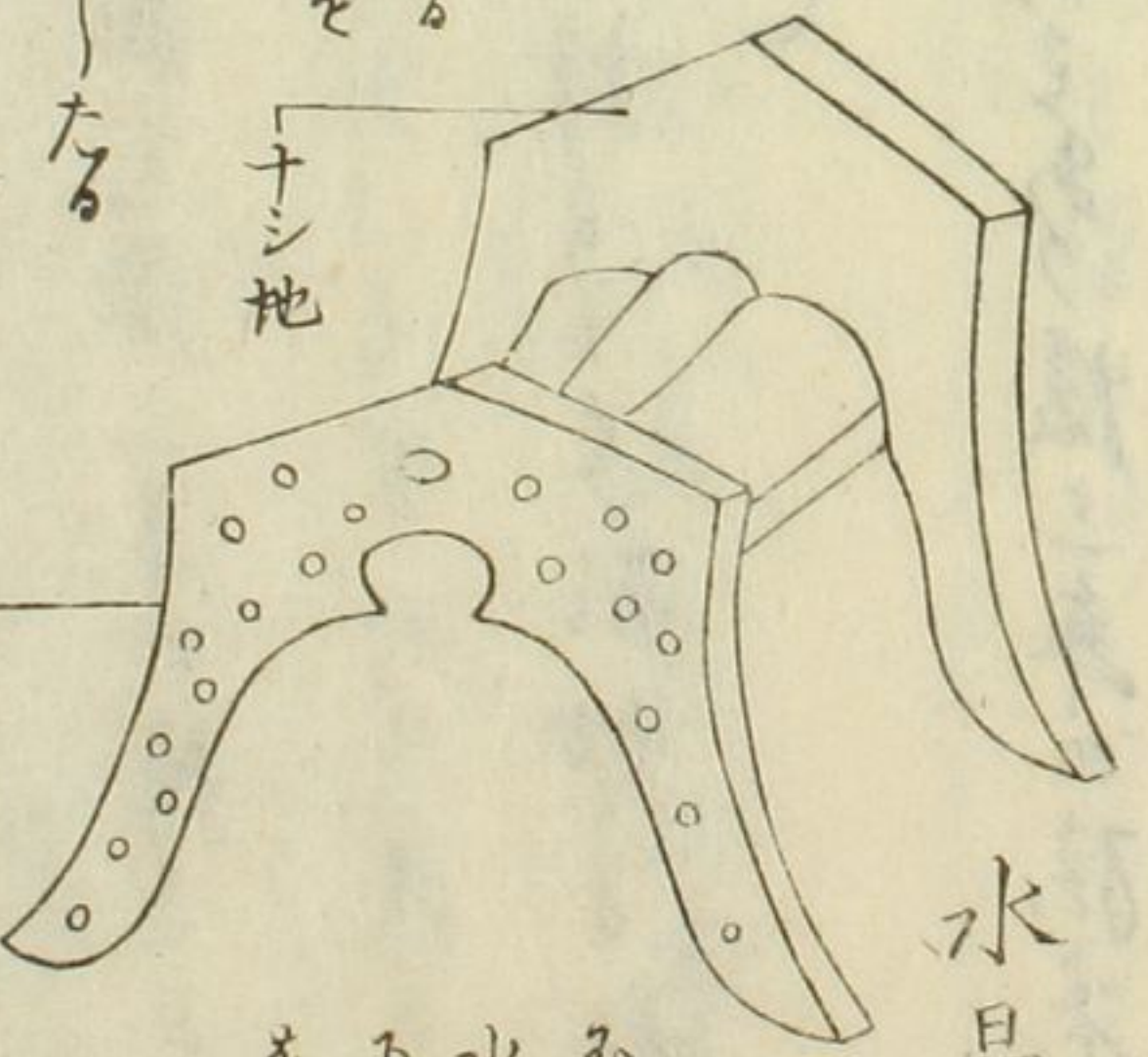
一カ草の端のきんちや草との物古の無く後三年合戦の  
 徳小見えるカ草何れもきんちや草なき又酒井雅樂  
 頭忠恭のころきんちや寛治二年の鞍具のカ草も本  
 ハキんちや草あつしを忠恭好むとてきんちや草を  
 付くれし由忠恭所持せられし按ずるに古の鏡を  
 せすむかひの鏡を付てさすむの先下へしれ向ふとさすむの  
 さすむへ向て是なりしなり草あり依もきんちや草あり  
 近世はさすむかこころひよもてさすむのさすむ上へ向のあさすむ  
 のさすむ出しはさすむのあさすむをおつんうあまきんちや  
 草出来し又古の鏡かこころちやありしなり草あり

寛治二年の鞍鏡の圖



半舌の鏡也  
 古鏡  
 鏡の根を張る  
 エミありシノキを  
 五方  
 半舌といふ丸き形を半かきたる  
 ゆく形の形もあはれ古より也

水晶鞍



玉いづれも  
 水晶あり  
 下は踏の具  
 をさす

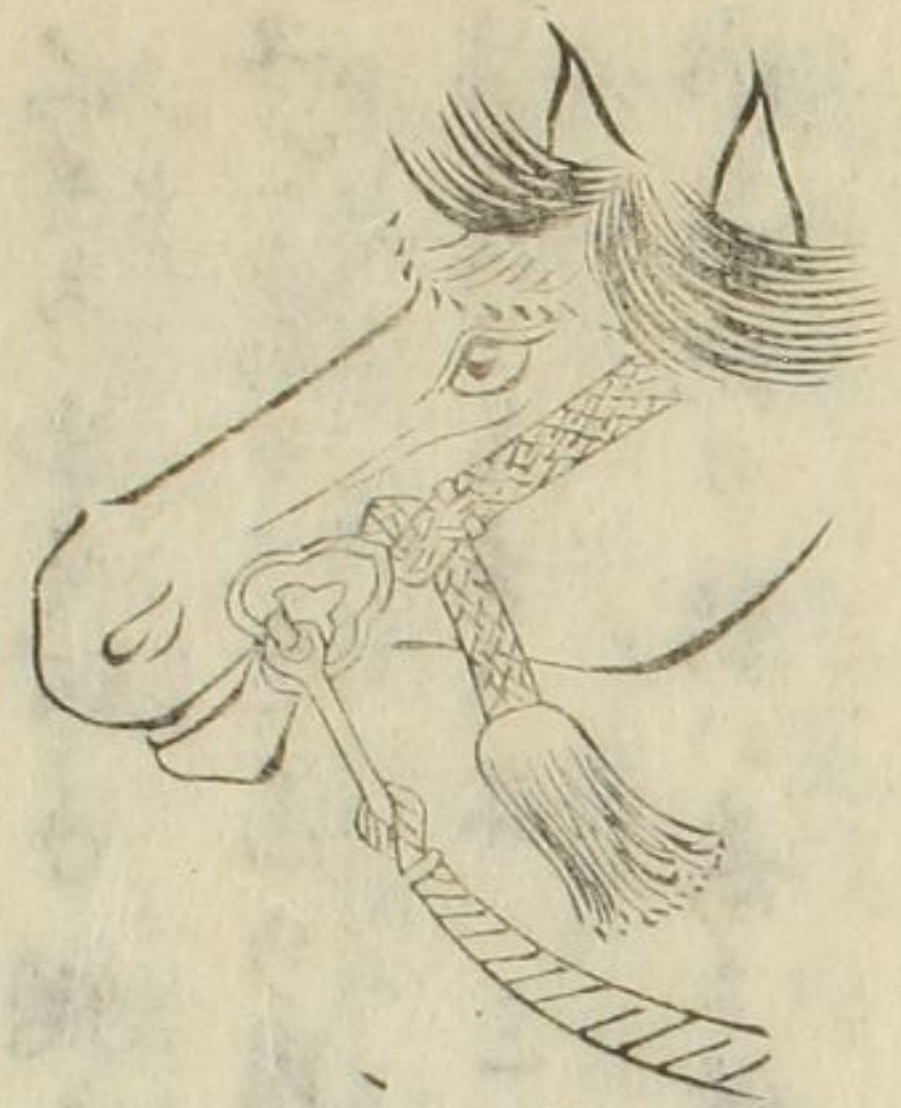
一後三年の鞍は元々大あきのあつし  
 此の世の物よかりるありゆくゆくおわひあり  
 一古の鞍はいし形あきもりし形ありゆり定るは  
 右の鞍の思ひし知るべし藤田共清政清平治の戦の時

平治の後は少  
 おぬいてづやく  
 とつ形を切て  
 そのうらうらる  
 うらよ子形を  
 切てあつは時よ  
 うらよとくまう  
 くらとく  
 〇後三年の陰ハ  
 鎌倉の朝その  
 時よまうら陰ハ  
 平治元年より  
 美治の代よそ  
 わらうは五十年  
 秘のま

与三老弟門景安が首をさすは十二月廿七日巳の時をう  
 一村雨のうて鞍の端よりうみえあうらうらひを義平  
 子形を切てあれやそのひくもあつて子形を  
 切てあつ中平治物語は是をうら子形を切てあつ  
 有らあれはこま子形を切れといふられあれ鎌田  
 よう子形始つていふ説あり非し後三年の繪よ子形切る  
 鞍ありまてよ前よ陰をあらうらすやう後三年の陰院の  
 時画き一春日神取傍馬の繪よ子形切る鞍をえ  
 たり鎌田より前のもこ

いふくこの葉どみといふらうらあり後三年の陰をあつ

是ときたる騎馬武者の馬のうらと皆子形この葉をここの  
 うらをあらうら



この葉は  
 けこらうらけこの略語  
 今うらうら

は馬後三年合戦繪をあらう

一 後三年の陰をうら小騎馬武者の陰よ子形と同様は飾  
 を深うら子形のゆくあり網をうらの再の陰ハあつて腕  
 の下よ結びてはあやうを両方また中へ引あらしを鞍

一 水晶地の鞆の糸は結ぶは阿字に十字の水晶鞆の祥  
 を以て考るは水晶を細く切ると龜甲形又ハ石を以て  
 して青貝を摺り入たるは鞆の地は遠くもあつた  
 一 水晶地の鞆の糸は結ぶは阿字に十字の水晶鞆の祥  
 を以て考るは水晶を細く切ると龜甲形又ハ石を以て  
 して青貝を摺り入たるは鞆の地は遠くもあつた

晶を以て入る物ありて是も水晶の下に五色の徐の具  
 を以てたる成べし是推量の趣を記す

一 厩乃事三光院内府記云厩禁中ハ被置左右馬寮被繫  
 御馬侯以此准據諸家於面向不立厩侯武士依為守護以弓  
 馬為業然間於面向必立厩是公武之差別也二間三間者諸  
 人通法也五間以上者依分国之多少有其負仍為十三国之  
 拜領依十三間之厩規模之由兼及

一 古代名家は用れ  
 鞆覆ハ今武家は用る  
 物ハ異之ハ圖

雜記十三

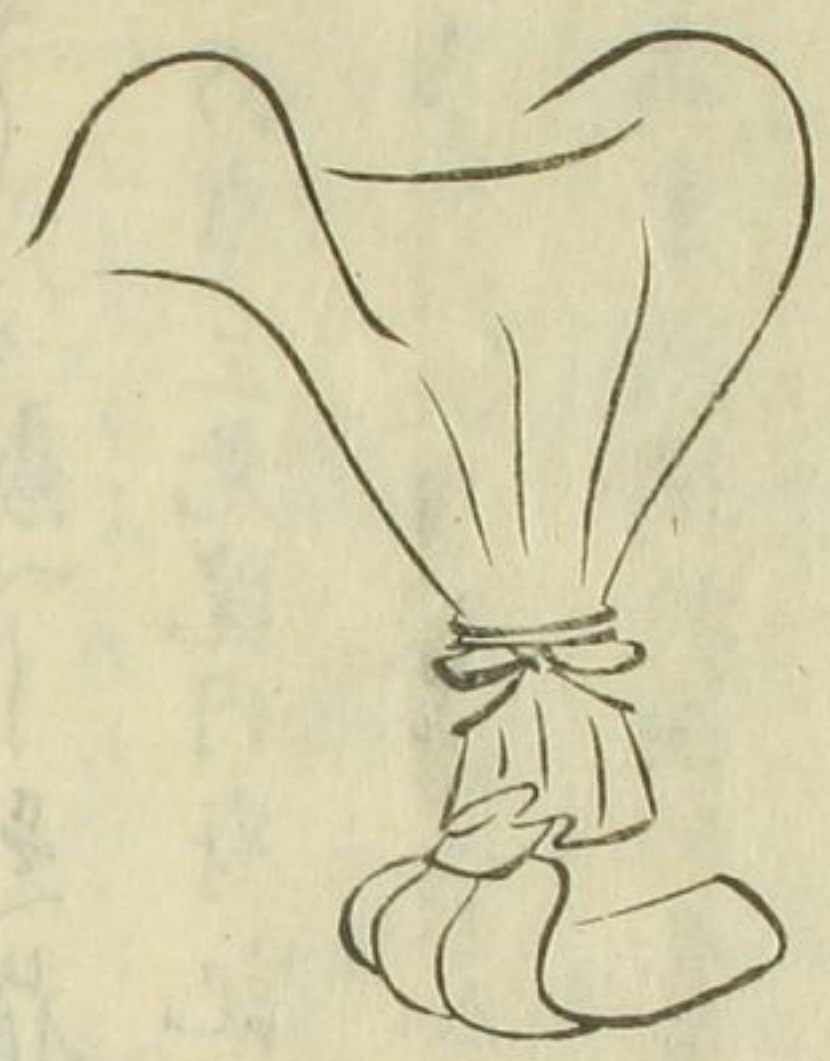


縫物花鳥ノ類也

猪紫草

後このおりの類は幅三尺斗長サハ鞆はあかけ鉈のかこふは  
 玉の紐は赤鞆履と云は後を張ておるは透鞆履とい  
 このおりの類のうす物とて織目のほき通る物とてしる也  
 後より衣を付ても作るとおくるは作らばおくるは後と

鞆よりけりる也



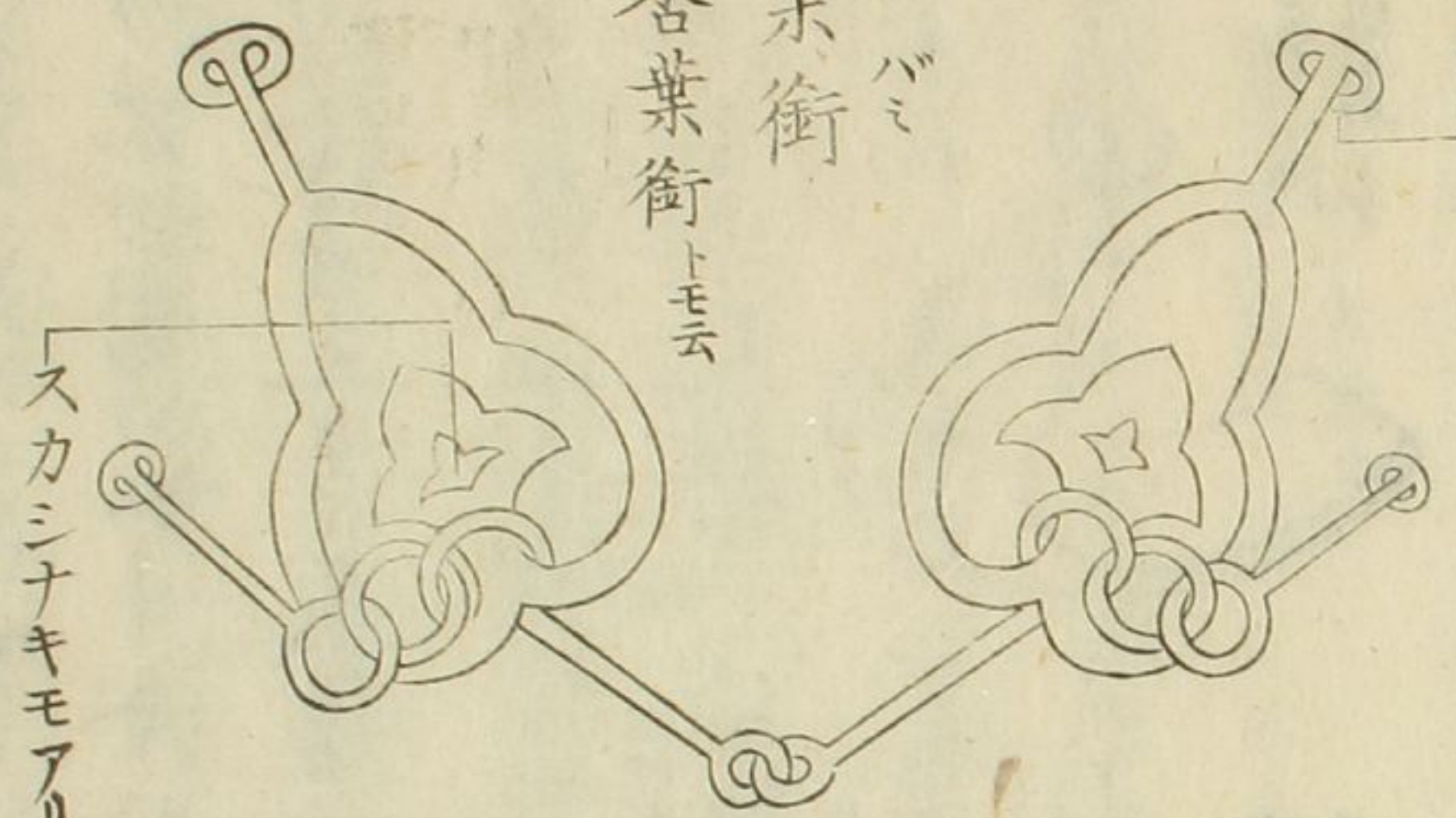
鞆は赤うけりてカ草の  
 不よりてまがらうとせし結か  
 此鞆は履年中行事の鞆より

右の鞆は後寛治年中の製を模したるを予見之 柄井忠菴の  
 許は有ら

一 古<sup>コクツハ</sup> 衞<sup>ヱ</sup> の 圖

此はギリノ切目ナキモアリ

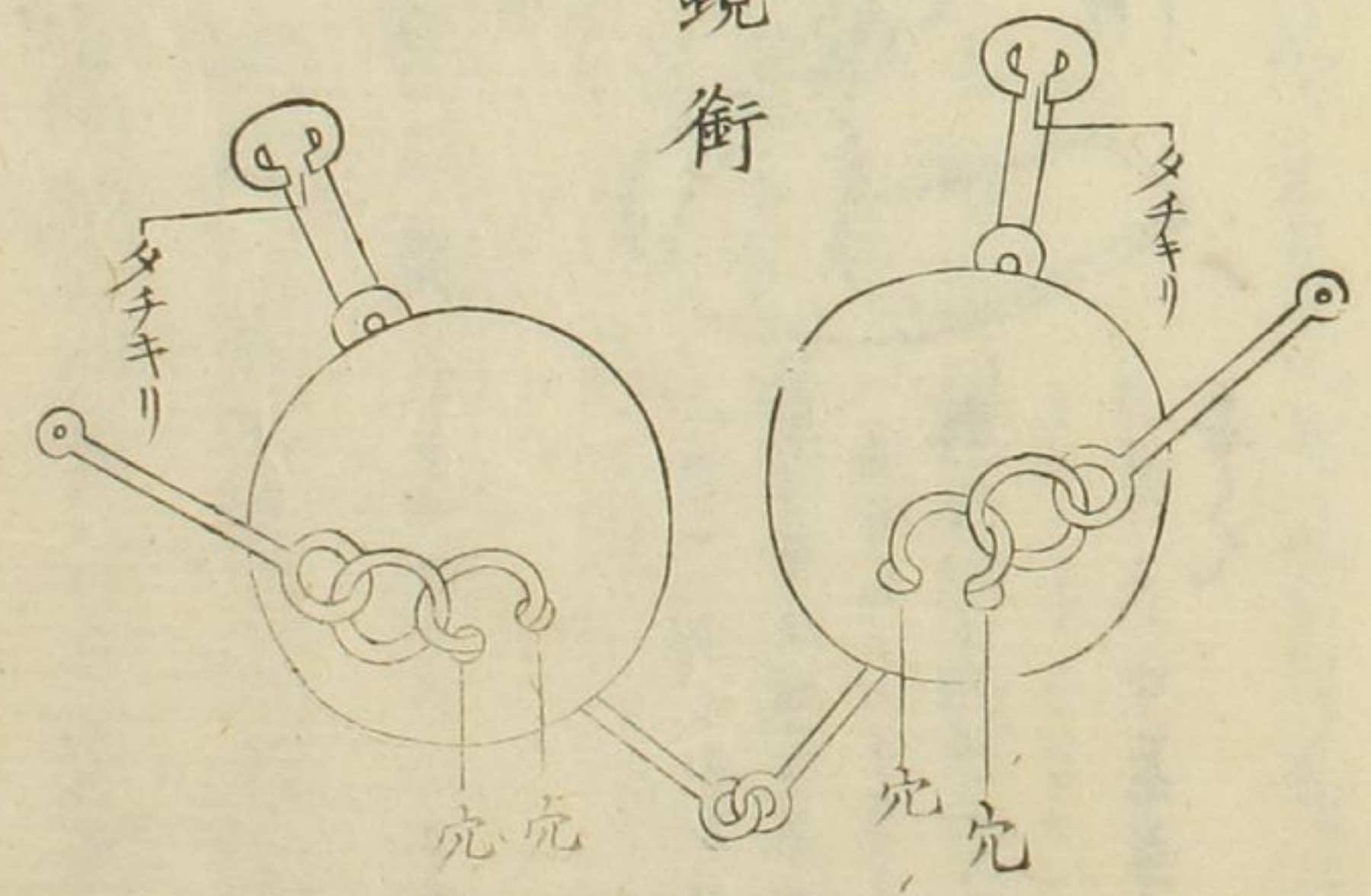
コノハバミ  
 木葉衞  
 杏葉衞トモ云



スカシナキモアリ

雜記十三

鏡<sup>キョウ</sup> 衞<sup>ヱ</sup>



穴 穴

穴 穴

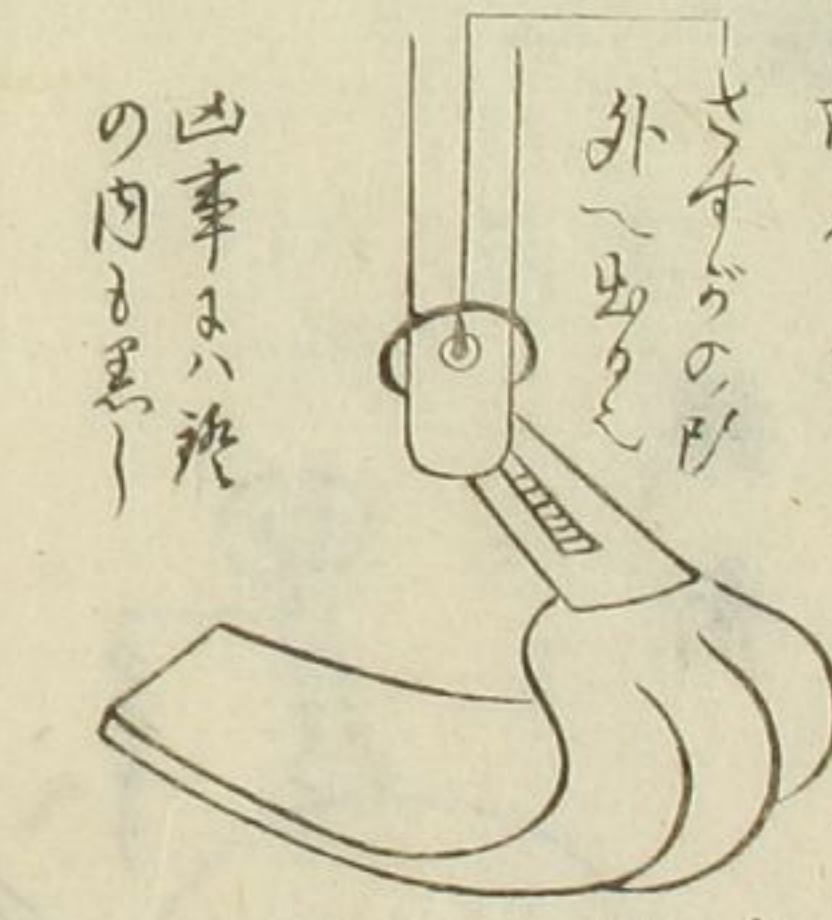
五十四



一 鏡のうけやう古の鏡ハさすがに言わしられ上より金れりり

たり茶の圖の如し今ハかじらびの上よさすしづを付て上へ  
むけてさすこさし極吉凶のさああり古の鏡もも同し

事とさすづの取外へ出のハ凶事又用之吉事ハハさす  
がの取内へ入るし 吉事といはるの取をさ



今世ハハたハ凶事の時の  
めくさすづのかしらを外  
へ出たそのさきこまて  
臆をいしりたきん  
ちや草を付る古の  
カ草ハハ中着草を  
無し

一 汗のくまんの鞍とまハ今くくまんどのゆく希後の悔の

山さうりハはまきさき角ん伏懐したる義隆記 志ゆかま取

小思今毛ある馬はのくまんのかくをきてどふたりせると  
あり 今より吉次  
馬のあり

一 むらけきをくかひはまき草多植た後高忠ゆあす  
そのあうんえんうり義隆記 志ゆかま取 見をれせあん  
とえつきげある馬といふけちの 伏懐  
地 今をきて大まづの  
むらけきくかひはまきくさ

一 ぬくくくらの百草我物作はあがまきくする白くまん  
のくままん志や志うりの山をさきあるをうけくく  
くくまんのたりあきりれてそのつうくくありくみ

追考古き木の  
葉をくままん  
あまのひの  
を根のうすま  
して包くあり  
ひつてもある

が換へ失ふこと  
又ゆはやくみ  
くらとあるべし  
眼見もたゞ  
こゝろもあつた  
べし金もたゞ  
かむべし

くらこの字 祥ありは 進多可考

一 七条細工の記と云物 東鑑六ノ巻は 是より下ノ文は 細細

工字七條宗紀太<sup>キタ</sup>丸と何り 又七條紀太<sup>モリ</sup>丸と何り 又七條紀太<sup>モリ</sup>丸

貞と何り 是を以て考れば 七條宗紀太丸 宗貞と云へし

者ハ 細細工を此の考れば 銅の記を 作りしと云へし

一 是れも ともおもひ したまへし 云ハ くらこの如きの さまお

うひを 通事所のある さまをいふ 弓馬故実用書記 くらこの名

也 然るも 其の 付の 系の 名を たちごと ともおもひ した

まけとも 三 淋と云 是れを ば さまを したまへし したまへし

くらこの さまごと 古ハ 是れ 物也 古書 にも 古ハ 捨る にも 云へし

近代用を 扱へ 古き 後ハ いかゞ づいの 括ひ ありし のを 針を 書り

一 泥障を ば かくる さまをいふ べし び 七 寸と云 之 旧記ハ いかゞ せん

あり 是れ づい び あり づい び 懸る さまをいふ づい づい づい づい づい

云々 網を たち づい づい づい づい づい づい づい づい づい づい

くらと くらと づい づい づい づい づい づい づい づい づい づい

留を ば づい づい づい づい づい づい づい づい づい づい

一 鞠の 四方子 の 名 あり の 丸 を とり け け 前 の 名 を かり け け

後 の 丸 を 志 する 後 の 名 を お と あり 説 あり 用 へ 云 べ し

四ノ とも 本 名 志 する べ し くら け け 云 々 名 あり 源 平 盛 表

記 大 平 記 あり くら け け 歌 の 首 を 志 する け け あり あり あり

の吳名をとりはけと云ふ事はけの語とを志不也了  
徳をひまび有置も首をきて付りあるにかりはけは  
かどいふ名は古事よをて云ふ事と用べしと云

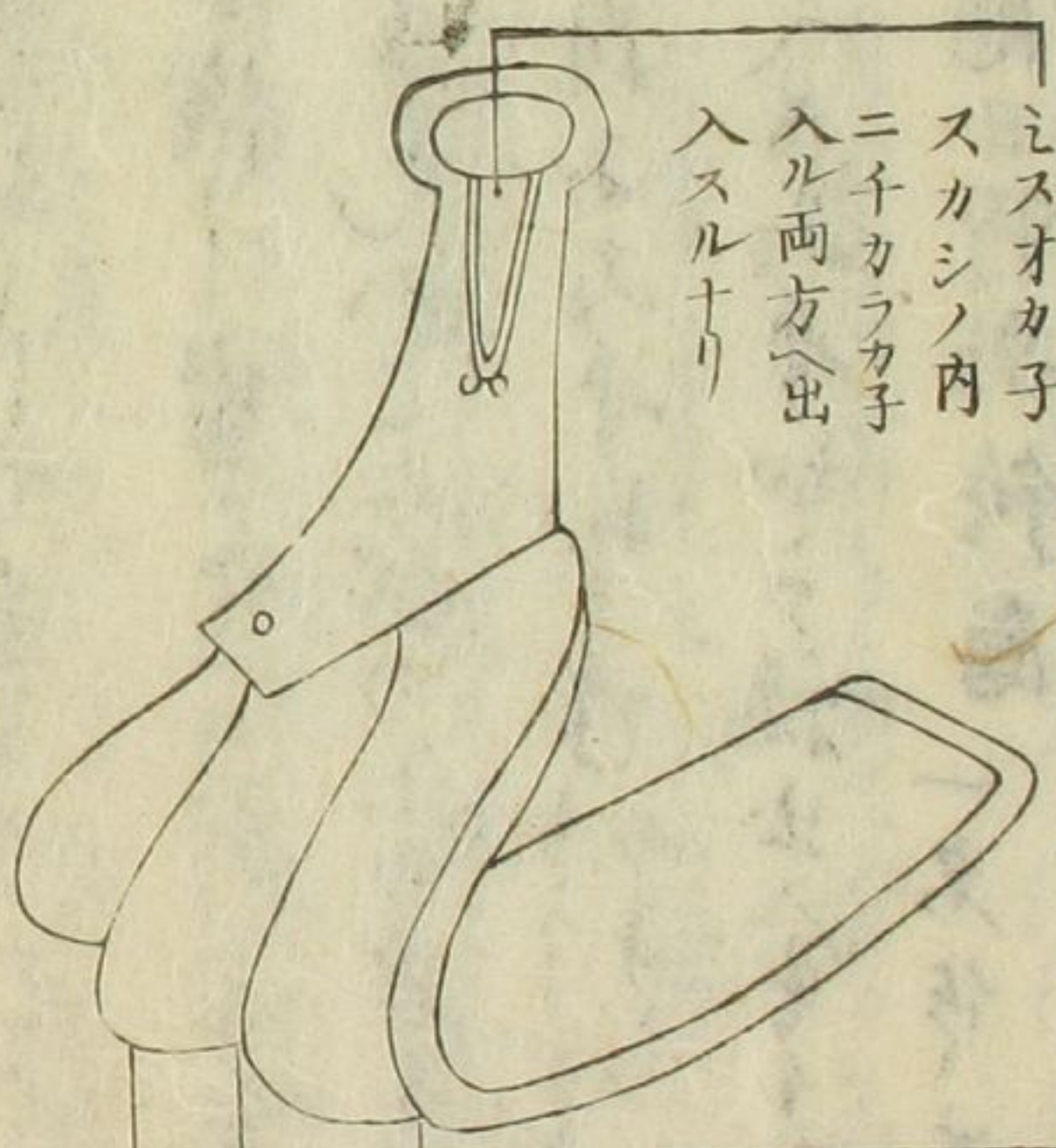
一 依り木掛と云は鏡の事或は依り木四所言鏡は宇治川  
の先傳の時カ草は鏡を懸るは花の如くまうけは左鏡  
を右へうけ右鏡を左へうけたる故右の如くするを依り木  
掛といふ事是外カケト云カケヤツシ鏡ノカコカシラ  
外へ出ル也是ヲ能州カケトモ云也 右の脱遊之平家  
物語盛衰記末監おも見先は安流之依り木うけと云ハ  
カ草ようけするよあはるに五六掛か賀掛あはるま如く  
掛るハ鏡を伴ふ事を云ふ近江國日野と云ふ所を作たる

鏡を日野掛と云日野うけの鏡を依り木掛ともいふ近江  
平八古依り木氏の領かたあり依り木家と日野  
掛を同じふに依り日野掛の事を依り木掛ともいふに  
日野掛の鏡ハ花の鏡よりハ小形なる元々て懸神衣に  
肉を付ず抱えあはして垂ありともいふ事申言あり  
亦あるも云後一留こもの新目急之舌先の外表  
の方もある事かこらびの上の方を細長くすといふ  
ことすの内の内ふみすおの事ちりりりり  
の事し おさやうしてあり  
うへもこらうへもみすおの事出入あり

近江國日野掛鏡圖

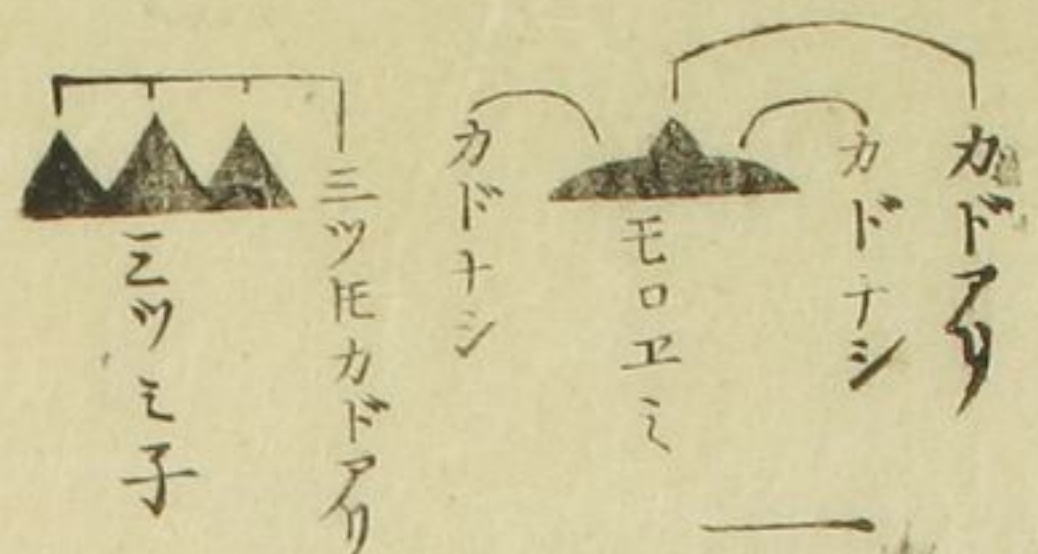
一名依り木掛

ハトム子ノ形  
如此中高ナラ  
ス丸ミナシ  
エミアサシ



ハトム子ノ形  
如此中高ナラ  
ス丸ミナシ  
エミアサシ

此所ノ折目急也  
エミ甚浅シ  
此中通リ両方ト同  
高サナリ



一 笠の形と云ふはもとむきのつらき形をいふ笑の字をあ  
るゝ人の名に不の心をも名付くもし 徳名みといふは  
むきの形より峯と云ふ形外 内はけん又片意といふ  
かゞよふ斗意とありカサはかたたる可外なる方斗も意と

ありと云ふ形外 内はけん又意とありといふは一向は意み

ありと云ふ形外 内はけん又意とありといふは一向は意み

正面よりむきふんる形あり

一 付野靴と云ふ靴一糸禅問 兼良 乃尺素徳来と云へたり様

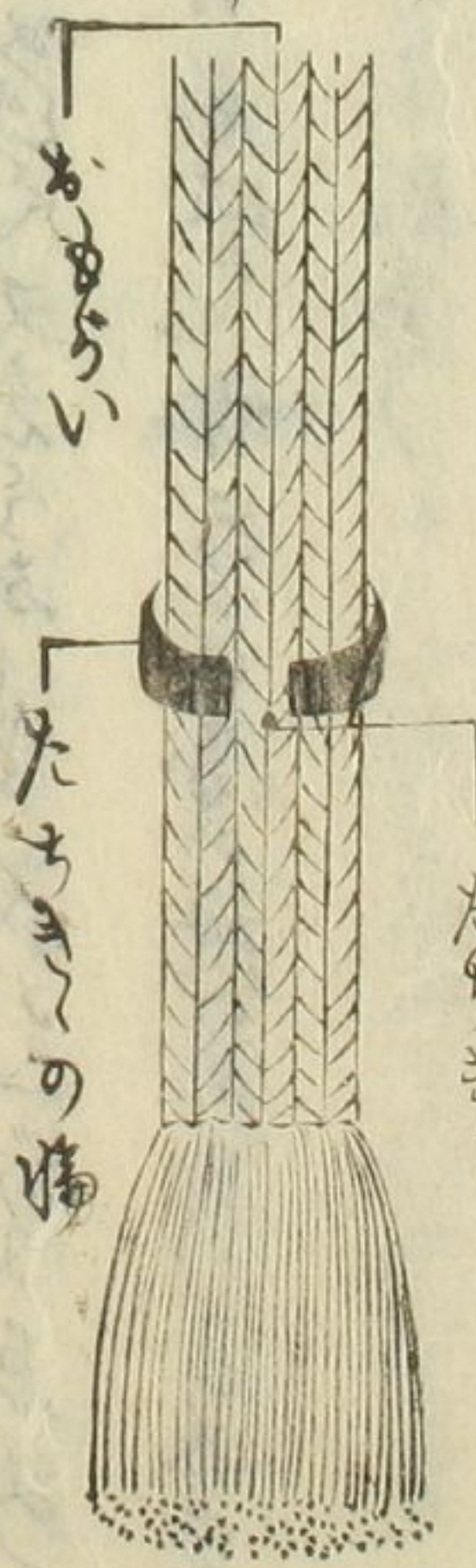
雲記は甲州付野村と云ふるんえう付野靴ハ甲州付野村  
と云はれり也 靴をいふある一説信濃國付野村と云  
何れは所の名物ありともいへり

一 鏡鞍と云ふ若後脇の表を一面は銀又ハ銅云云論がまを  
張り包み山形の上よりつゆひきと目と見せやうんを  
愈小き燕を乗せぬり 石木先も云ふ包み燕と云ふ

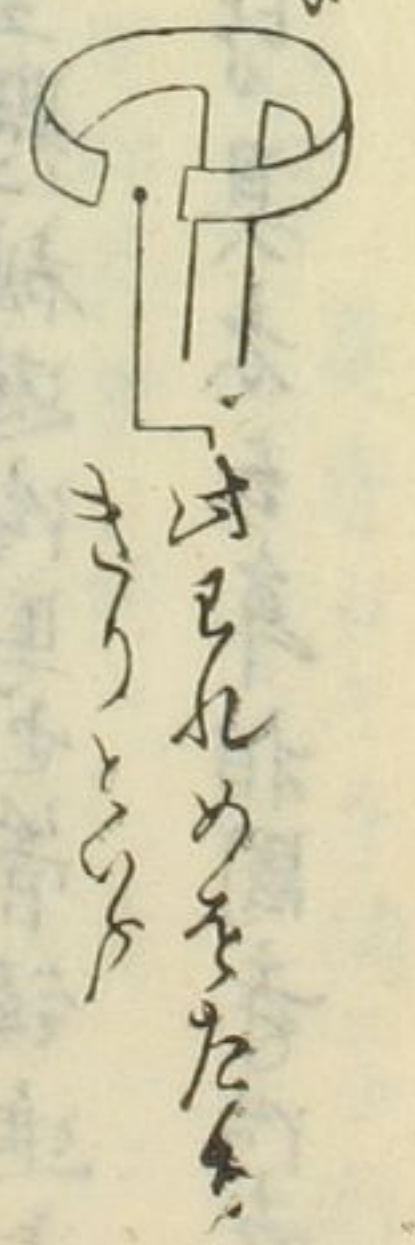
予カ家ニ流靴ヲ藏メタリ是ヲ見テ可知是ヲ見ス人ハ甘マクノ妄説ヲコシラヘ出スナリ

居木先もくちりて包ニ流見為るお後端の裏の方原木  
 いら手見を包ニ流見為るお後端の裏の方原木  
 皆知ぬ人の妄説之流靴日記を考べ

一 銜の頭の幅をたちきくとも今世たちきくのみをせしむ  
 而の幅は切目ありたちきりとも切目ハ何の幅ぞと  
 古いたちきくのみをせしむるありあはれおむつを縫  
 て踏ぐおむつのみをせしむる幅は通りかへ何れも  
 がいの耳の幅をたち  
 みるより入るおむつ  
 てむきかへ



一 くの口の幅がいはれおむつ  
 おむつは



古のくちりたちきり古の足の如く廣くはられおむつ  
 がいをせしむる入る  
 古ハおむついたちきけを不用  
 也後代ハおむついたちきけ  
 たちきくの幅を  
 いふべきなり  
 を用るおむつたちきくの幅を狭くお  
 合をせ作る内へたちきりの幅よりおむつを  
 入るより



くちりのたちきりの幅は通りかへ何れも  
 の幅よりおむつをせしむる幅は通りかへ何れも  
 あり幅をたちきり  
 田へのあはれ



うる地あふをきりハ、まろく、まはせれば、むちの外わくこもあふ  
田一あれやまゝ一鞭のうそぬき草とくこま回

一馬の鼻皮ハナカリの数を一間二間と云ふ馬を馬をうろあぎ置ふい  
まあつともをひてつあざ置く一敷を一間の分二百のま  
いりあつてまあ皮を一間二間と云ふ

一だおひ一名ヤセと云物今世用之るの尻は数物あつて  
あつてまろく、まはせれば、むちの外わくこもあふ  
田一あれやまゝ一鞭のうそぬき草とくこま回

一今世追オヒヅナ徳と名付て、あまの祖徳の太き徳を今世あまの  
引馬は用之これ古代まき物古く徳と云ふ徳と云ふ  
まて布白紺着あまのこまをうろくらの徳と云ふ

きりて引之又白く置も又褐色のきり置も軍隊は用之

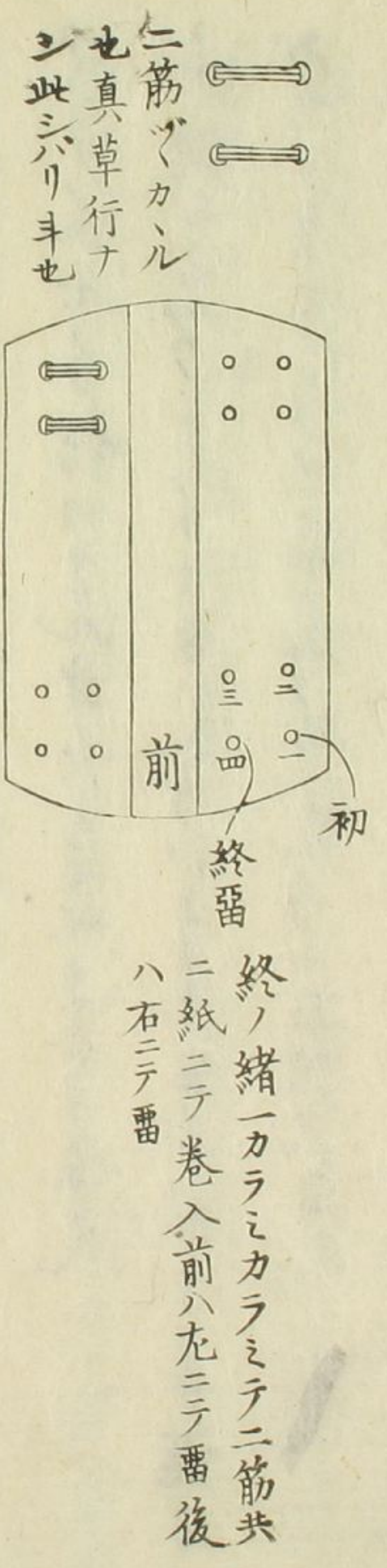
一子徳のまじりと云ふ子徳のまん中のもてまよ子徳を名  
まろくこれむ子徳のまん中たまをまよまろくあつ

一子綱を名りうろくと云ふあつてまよと云ふ同一子徳は  
あつてまろくこれむ子徳のまん中たまをまよまろくあつ

一表イギはらぬ鞆イギまきろくむろをへると云ふ本真助雜記まろくへ  
ころきるまろくをへると云ふ本真助雜記まろくへ  
まろくこれむ子徳のまん中たまをまよまろくあつ  
痛の居木の穴へ細き竹を十文字穴と穴へつまろ  
たろをきりまろくと云ふ左おより竹を十文字穴と穴

しつぎをり 墨をせれば志ばらむも持とまおるゝし塗靴  
 はまきず付おきりばりハ入ずるうは紙よりあゝるし志  
 ばらむ木地の鞆ハきりむり板のりて井のあ先とまよ  
 矢の管のめくきりたるがごとし

一作の志ばり仕様 伊勢国幡家信




如此ニスジツ、カナル初一ニトホシ緒ノ端ヲヨリメ入テ  
 日スガヨシオノツカラニ筋トホルナリ

シバリ繩太サホソキ筆ノ千クホドニテヤハラカニ敷ノ  
 シラベノ如クニツヨリ合スル繩長サ金サシ一丈アレハ四方シ  
 バラル、也繩ノヨリカタキハアシ、

木 カ子  
 木ニテ繩ヲ  
 カラミシムル也  
 木サキニテトメノ緒ヲ穴ハサシ込  
 ナリ何方ニテ留タルカ如此スレバ  
 トノ見エズ

一 竹の根鞭 紫竹の鞆 是別あり馬歩書云竹の根の  
 むちハ紫竹の根之紫竹といむるやま竹と書おはるる  
 五巻の外のきあるは依て平人のゆめく石河田之き一カ極  
 昔良敷おは用之云く元来紫竹ハ和物之きもむらさき  
 いろくば根をむちよ作りを紫竹のむちと云く淡竹と



むちにある物もあらず竹の根むちハ真竹の根之本草綱  
 目卷世七  竹時珍曰根下之枝一為雄二為雌若生笋其  
 根鞭喜行東南云々此竹倍ニ真竹也此真竹の根を  
 むちよきハ竹の根むちと云々之を旬名竹根むちハ通に  
 國栗太郡草津分少ハ奉ハ美濃國分少ハを草津と云  
 むちよきハ竹の根むちハ楮木 楮名ツ  
エノキ 此木を以て  
 馬鞭を修ると云 本草綱目  
爾雅見エ 楮木一名靈壽木此云又云  
 紫赤のむちハ老の竹の根むちを楮葉とて能く色を付  
 登の上の古竹のむちハ竹の根むちを楮葉とて能く色を付  
 云々以上方抄を良版斗也用ひありしむちと云々

あひなきやう考

一 十文字響古代より有る物也永正日記云十文字響小  
 十文字響の名云々云々寶徳年中小笠原清元云  
 矣名所記も十文字響の圖あり

一 張草鞆張鞆の多し二物共ニ鞆の惣体を皮にて包  
 めたる云々云々少くハ其別あり張草鞆ハ滑  
 草にて張り付包にて造るを云ハ又張鞆ハ元皮  
 にて造るを云々造るを云ハ張鞆ハ元皮を  
 用ゆ形右列ニ鞆履を惣たるおハ謙倉年中行  
 事云張鞆ハ鞆履かけて常多あり云々

